

学 位 論 文 題 名

子どもの戸外遊び環境としての公園整備に関する研究

学位論文内容の要旨

子どもは様々な遊びを体験することによって成長し、遊びや遊び空間の中で得られた体験は子どもの生活や発達に重要な影響を与えていると考えられる。しかし、戦後の経済成長と都市化の進展、核家族化、少子化などの社会的環境の変化とともに、子どもの戸外遊びをめぐる環境は著しく悪化している。また、空間的には道路、原っぱ、空き地などの遊び場が少なくなり、反面、都市公園は子どもの身近な戸外遊び場として、重要な役割を担うようになっている。

これらのことをふまえ、本研究では、I) 街区公園における施設整備の変遷、II) 積雪寒冷地における冬期の戸外遊びと遊び場に関する意識の変化、III) 意識調査や写真を用いた評価実験による戸外遊び場に必要空間・要素の解明及びその日本と台湾との比較、IV) 社会実験による冬期積雪条件下の街区公園における遊び環境の創出、について調査研究し、総合考察として、V) 今後の戸外遊び環境と公園整備のあり方を検討した。その概要は以下のである。

I. 街区公園における施設整備の変遷

札幌市における街区公園の施設整備の変遷を把握することにより、子ども達にとって魅力的でより豊かな戸外遊びが展開できる街区公園のあり方を検討した。その結果、施設内容は面積の広狭と年代による相違が明らかであった。すなわち、都市の拡大と共に街区公園の個所数及び総面積は著しく増加したが、1983年までは1箇所当たりの面積は減少した。しかし、1984年以降、公園の面積は増加する傾向がみられた。近年では、身障者用水飲み場とコンビネーション遊具の設置率が高まり、便所と水飲み場の設置率や広場の面積も公園面積の拡大により増加する傾向が示された。

II. 積雪寒冷地における冬期の戸外遊びと遊び場に関する意識の変化

札幌市の小学生を対象として冬期の戸外遊びの実態と意識における約10年間の変化についてアンケート調査を行い、戸外遊びの減少の要因を明らかにしようとした。その結果、この約10年間で子どもの戸外遊びの頻度が大きく減少し、戸外遊びの意欲も低下していた。これには、親の遊びへの態度が強く影響していた。また、「道路」や「空き地」の利用率が低下し、冬期の戸外遊びの場は「公園」「家周辺」へより集中していることがわかった。一方、この約10年間で公園の利用頻度は変化しておらず、冬期の戸外遊びに占める公園の役割は相対的に増加していた。今後の冬期の戸外遊び場計画においては、地域に応じた遊び場の魅力ある施設整備のみではなく、戸外遊びの重要性に関する社会的認識の醸成や遊びの魅力を体験させるためのソフト面の充実が必要と考えられた。

III. 意識調査や写真を用いた評価実験による戸外遊び場に必要空間・要素の解明及びその日本と台湾との比較

1. 子どもの戸外遊び場に関する日本と台湾の比較

日台両国の大学生を対象とした原風景的遊び場の環境についての意識調査を行い、また、写真を用いて各種の戸外遊び環境について、両国の子どもと大学生の印象・評価を把握し、現在の子どもにとって、どのような環境や体験の場を提案すればよいかを検討した。その結果、大学生の子どもの頃の主な戸外遊び場は、日本では公園、台湾では校庭であり、遊びの種類は、日本ではボール遊び、台湾では遊具遊びと散策であった。戸外の遊び場に対する印象語は両国ともに楽しい・面白いと答えた人が多かった。また、写真を用いた評価実験の結果より、両国の子どもとも、木製遊具のある場所の評価が高く、木製遊具に対する印象語は楽しい・面白いが多かった。一方、大学生では、両国とも自然性の高い場所の評価が高く、気持ちいい、楽しい・面白いといった印象語が多い傾向がみられた。今後の戸外遊び環境づくりでは、子どもの要求に加え、大人になってから、原風景として印象に残る自然体験を可能とする場の両面から検討すべきだと考えられた。

2. 自然の遊びに対する子どもの認識

札幌市に居住している子ども達を対象として、各種の自然的空間の写真を用い、それらの空間に対する印象・評価・経験の有無を把握することにより、自然遊びに関する必要な空間や要素を明らかにしようと試みた。その結果、一般に樹木のある場所、ある程度手入れされた場所についての好ましさが高いことが示された。また、自然的空間での遊び体験のある子どもは、遊びの種類として動物・植物遊びと木登りを多く挙げ、ポジティブな印象語が多い傾向がみられ、遊び体験が自然な遊び場の評価・印象・遊び方に影響していることが明らかであった。

IV. 社会実験による冬期積雪条件下の街区公園における遊び環境の創出

市民グループとの共同により、札幌市内の積雪期における公園における除雪によるアプローチの確保と積雪を利用した冬の遊び場の創出を試み、その子どもの遊びの形態に与える影響を調査した。その結果、創出前は、利用人数も少なく利用箇所が限定されていたが、創出後は利用人数が増加し、雪山や壁ができたことによって公園の利用範囲が広がった。また、遊びの内容は、創出前は雪遊び・スコップ等の道具を使った遊びが多く、創出後は滑り台及びジャンプ台の利用率が増加した。しかし、それらの効果の見られる期間は限られていた。冬期の公園整備の今後の展開としては、ハードな施設整備のみではなくボランティアや住民によるソフトな運営管理の導入が重要と考えられる。

V. 今後の日本における戸外遊び環境と公園整備のあり方と、台湾での戸外遊び環境づくりの方向性

1. 戸外遊び環境と公園整備のあり方

子どもの遊び環境にとっては、多様な遊び空間の存在が望ましく、断片的に存在するそれらの空間を有効に活用するためにネットワーク化が必要である。そのため、子どもの行動圏内で残された自然的空間を保全・確保し、校庭、交通量の少ない道路、児童会館、その他の公共施設敷地など戸外遊びにかかわる地域のオープンスペースを遊び場として利用できるように整備し有機的につなげることが重要である。また、最も身近な子どもの遊び場としての街区公園は、子どもや地域住民の要望と周辺の公園の配置状況を考慮しながら、自然的要素を重視し、地域特性を活かした整備が必要である。また、公園の整備や管理運営では地域住民と行政の協働が重要であり、子どもの多様な遊び体験を支えるための住民組織の再形成も大きな課題と考えられる。

2. 台湾における戸外遊び環境づくりの方向性

日本と同様、台湾においても都市に残された自然的空間の保全や、親の戸外遊びに対する認識の向上は今後の戸外遊び環境づくりに重要な課題である。また、都市公園の整備が遅れているが、まず、社会状況に応じた公園緑地に関する法令を立法し、公園緑地の整備や管理に関する行政的な体制の整備や専門家の養成が望まれる。また、台湾の子どもにとって利用の多い、放課後の校庭を積極的に遊び空間として位置づける必要性を指摘した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 浅 川 昭一郎

副 査 教 授 大 澤 勝 次

副 査 教 授 陳 省 仁 (北海道大学教育学研究科)

副 査 助 教 授 近 藤 哲 也

学 位 論 文 題 名

子どもの戸外遊び環境としての公園整備に関する研究

本論文は、図41、表69を含み、7章からなる総頁164の和文論文であり、別に3篇の参考論文が添えられている。

子どもは様々な遊びを体験することによって成長し、遊びや遊び空間の中で得られた体験は子どもの発達に重要な影響を与えと考えられる。しかし、都市化の進展による空き地や自然的要素の減少、核家族化や少子化などの社会的環境の変化など、子どもの戸外遊びをめぐる環境は著しく悪化している。そのような中で、都市公園の整備が進むとともに、子どもの身近な戸外遊び場として、公園が重要な役割を担うようになっている。

本研究では、I) 街区公園における施設整備の変遷、II) 積雪寒冷地における冬期の戸外遊びと遊び場に関する意識の変化、III) 意識調査と写真を用いた評価実験による戸外遊び場に必要空間・要素の解明及びその日本と台湾との比較、IV) 社会実験による冬期積雪条件下の街区公園における遊び環境の創出、について調査解析し、V) 今後の戸外遊び環境と公園整備のあり方を考察している。その概要は以下のようである。

I. 街区公園における施設整備の変遷

札幌市における街区公園の施設整備の変遷を分析し、年代による面積及び施設内容の相違を明らかにした。

II. 積雪寒冷地における冬期の戸外遊びと遊び場に関する意識の変化

札幌市の小学生を対象とした意識調査により、冬期の戸外遊びの実態と意識における約10年間の変化と戸外遊びの減少に関わる要因を解析した。その結果、戸外遊びの頻度が大きく減少し、戸外遊びの意欲も低下していたが、これには親の遊びへの態度が強く影響していることを明らかにした。また、冬期の戸外遊び場としては「公園」や「家周辺」へより集中していることを示した。

III. 戸外遊び場に必要空間・要素の解析とその日本と台湾との比較

1. 子どもの戸外遊び場に関する日本と台湾の比較

日台両国の大学生を対象として子どもの頃の遊び場の環境についての意識調査を行い、また、写真を用いて各種の戸外遊び環境について、両国の子どもと大学生の印象・評価を把握した。その結果、大学生の子どもの頃の戸外遊び場には、日、台両国とも自然性の高い場所が多く、原風景的遊び場の重要性が示された。それに対して、両国の子どもでは、木製遊具のある場所などが望まれており、今後の戸外遊び環境づくりでは、子どもの要求に加え、大人になってから、原風景として印象に残る自然体験を可能とする遊び場も必要であると指摘している。

2. 自然な遊び場に対する子どもの認識

札幌市に居住している子ども達を対象として、各種の自然的空間の写真を用い、それらに対する印象・評価・経験の有無を把握した。その結果、一般に樹木のある場所、ある程度手入れされた場所についての好ましさが高いことが示された。また、自然的空間での遊び体験のある子どもは、遊びの種類として動物・植物遊びと木登りを多くあげ、ポジティブな印象語が多い傾向がみられ、遊び体験が自然な遊び場の評価・印象・遊び方に影響していることを明らかにした。

IV. 社会実験による冬期積雪条件下の街区公園における遊び環境の創出

札幌市内の積雪期における公園において、除雪によるアプローチの確保と積雪を利用した冬の遊び場の創出を試みた。その結果、創出前は、利用人数も少なく利用箇所が限定されていたが、創出後は利用人数が増加し、雪山や雪壁の利用によって公園内での活動範囲が広がった。また、遊びの内容は、創出前は雪遊び・スコップ等の道具を使った遊びが多く、創出後は滑り台及びジャンプ台の利用率が増加したが、それらの効果の見られる期間は限られていた。冬期の公園整備の今後の展開としては、ハードな施設整備のみではなくボランティアや住民によるソフトな運営管理の導入が重要と考察している。

V. 今後の戸外遊び環境と公園整備のあり方

1. 戸外遊び環境と公園整備のあり方

子どもの遊び環境にとっては、多様な遊び空間の存在が望ましく、断片的に存在するそれらの空間を有効に活用するためにネットワーク化が必要であり、子どもの行動圏内で残された自然的空間を保全・確保し、校庭、交通量の少ない道路、児童会館、その他の公共施設敷地など戸外遊びにかかわる地域のオープンスペースを遊び場として利用できるように整備し有機的につなげることが重要であると考察している。また、最も身近な子どもの遊び場としての街区公園の整備に際しては、子どもや地域住民の要望と周辺の公園の配置状況を考慮しながら、自然的要素を重視し、地域特性を活かすことが必要であることを示した。さらに、公園の整備や管理運営では地域住民と行政の協働が重要であり、子どもの多様な遊び体験を支えるための住民組織の再形成も大きな課題であると指摘している。

2. 台湾における戸外遊び環境づくりの方向性

日本と同様、台湾においても都市に残された自然的空間の保全や、親の戸外遊びに対する認識の向上

は今後の戸外遊び環境づくりに重要な課題であり、都市公園の整備の遅れにたいしては、公園緑地に関する法令による行政的な体制の整備が必要であり、専門家の養成も望まれる。また、台湾の子どもにとって利用の多い、放課後の校庭を積極的に遊び空間として位置づける必要性を指摘している。

以上のように、本研究は、都市における子どもの遊び場について、遊びの実態と意識について多様な視点から調査解析し、公園整備の方向性について考察し、その成果は学術的・応用的に高く評価される。よって審査員一同は、曾 碩文が博士(農学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認めた。